

めでる



「信楽陶苑たぬき村（甲賀市信楽町）」

Contents

- 2 特集
令和8年3月17日(火)
春の宿泊研修 in 甲賀市・湖南市方面
- 訪問先の皆様からのメッセージ
 - 宿泊研修に参加して(学生の声)
- 12 「学内で地域医療の体験ができる」課外授業シリーズ2025
- 第四弾！ オープンダイアログを通して考えるチームでの対話のあり方
 - 第五弾！ 総合診療医のキャリアとEBMの実践
- 「学内で地域医療の体験ができる」課外授業シリーズ2026
- 第一弾！ 「暮らしの中の医療」地域に根ざす実践から学ぶ
- 15 紹介コーナー
- 滋賀医科大学 国際保健・地域医療研究会TukTuk
 - 滋賀県医師キャリアサポートセンター
 - 滋賀県医師会
- 20 編集後記

春の宿泊研修 in 甲賀市・湖南市方面

令和8年3月17日(火) ※日帰りで実施



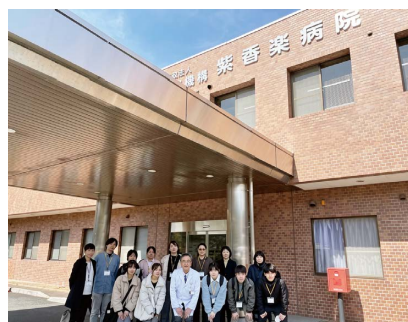
紫香楽病院

真田院長から病院の歴史を含む概要をご説明いただきました。真田先生ご自身が衝撃を受けられた重症心身障害児(者)医療について、医療関係者となる学生には一度は必ずその様子を見学してほしいとお話いただき、病棟の看護師長さんからは、病棟での看護の様子をお話いただきました。最後に、病院内を見学させていただき、病棟や外来だけでなく、療育指導室のスヌーズレンなどを体験させていただきました。



今回の見学を通して、一般病棟とは異なる、生活に寄り添う看護の大切さを学ぶことができました。
参加学生感想より

1番驚いたのはスヌーズレン室というものがあつたことです。調べてみるとオランダ語の「クンクン匂いを嗅ぐ」、「うとうとする」という言葉を組み合わせた造語だそうです。1970年代にオランダの障害者施設で考案され、ヨーロッパをはじめ全世界に広がりました。病院の中にちょっと不思議な空間があつて非日常を味わっているようでした。
参加学生感想より



2班に分かれて研修

信楽中央病院

北川院長から信楽地域の歴史を含めご紹介いただき、病院の概要について説明を受けました。その後、朝宮診療所へご案内いただき、朝宮診療所の在り方についてご説明いただきました。また、最後に朝宮地域で有名な朝宮茶を造られている藤田園にて朝宮茶の説明を社長からご説明いただき、珍しい吸り茶器でお茶を淹れていただきました。



甲賀市立信楽中央病院 朝宮出張診療所



今回見学した甲賀市は病院数が少なく、またその病院でできることが限られていましたが、限られた医療資源を最大限活用して可能な限り医療ニーズに対応し、対応しきれない分は市外の病院と連携して対応しており、改めて医療機関同士の連携の重要性を感じました。
参加学生感想より

陶芸体験や特産品のお茶を飲む体験など、医療だけではなく、その地域の文化に触れる内容も充実しており、楽しみながら対象の地域を学ぶことのできるプログラムでした。
参加学生感想より



信楽地域散策

今回は信楽で有名な信楽焼の絵付け体験を行いました。皆さん、それぞれが真剣に絵付けされていたのが印象的でした。続いて、遥か1200年以上前の奈良時代中ごろに、聖武天皇が造営した「紫香楽宮」の跡地(史跡紫香楽宮跡)を見学しました。



地域医療の現状や他業種連携の重要性など実際の現場でしか分からないことをたくさん知るきっかけにもなりとても貴重な経験でした。
参加学生感想より

甲賀・湖南市の病院や医療機関を複数見学させていただき、その地域の特徴や医療体制などの詳しい説明を通して、地域での医療の実際を知ることができ、とても良い経験になりました。
参加学生感想より

今回も地域の方々をはじめ沢山の医療関係者
学びの多い研修となりました。ありがとう



水口病院

與那城看護部長から水口病院の概要についてご説明をいただき、年々患者が増加しているが、医師や看護師だけでなく多職種のチーム医療で立ち向い、急性期病院とは違った自立性の支援・回復を促す医療を提供しているとお話いただきました。

その後、病院見学を行っていただきました。最後に青木院長からご挨拶があり、学生からの質問にも丁寧に答えていただき、経営の哲学についてもお話しいただきました。



どこか閉鎖的な印象があった精神科病院が、実際には明るくて開放的であった様子が印象に残っています。とても濃密な時間を過ごしましたが、新しい刺激を受けてまだまだ学び足りないのでもたしかりと時間を持って再び伺ってみたいと思います。 参加学生感想より

院長先生に直接質問する機会も設けられており、現場の考えや実情に触れることができた点も非常に有益でした。 参加学生感想より



医療と福祉の連携や地域でのNPO活動に関心がある私にとって、SSTや就労支援といった言葉は耳に馴染みのあるものでしたが、医療の現場で実際に用いられているのを聞いたのは初めてでした。医療と福祉が密接に繋がりがながら支援が行われていることを実感した。 参加学生感想より

こうせい駅前診療所

しが医療生協理事・湖南甲賀支部長の立入様より「健康づくりをつくる・平和をつくる・いのち輝く社会をつくる」の取り組みについてお話しいただきました。医療生協の取り組みについて理解してもらいたい、行政と一緒にやっていくことが大事と学生へ伝えていただきました。続いて、佐々木所長から施設の概要についてご説明をいただき、気候変動が今後どのように命に直結するのかについて講義していただきました。



地球の環境を整えることが人間の生活環境や経済状態を整えることに繋がり、最終的には人間の健康を作っていくのだと学んだ。 参加学生感想より

地域の住民の方々がどのような医療を必要としているのかを知るとともに、農繁期などの時期によっては病院を受診しにくいという地域特有の事情があることが印象的でした。 参加学生感想より

医療福祉生協の仕組みや環境と医療の関係について学び、視野が広がりました。 参加学生感想より

気候変動については、自分たちが今からできることもあると思うので、少しずつ学んでいきたい。 参加学生感想より



患者さんと医療者が顔見知りの関係で、患者と一医療者としての関係のみならず、地域住民同士としての繋がりも感じられ、地域に根差した医療が実践されていることを実感しました。 参加学生感想より



私は滋賀県出身ですが、今回の里親研修の目的地であった甲賀方面はあまり行ったことがありませんでした。思っていた以上に大津から車で行きやすく、滋賀の中でも辺鄙な場所というイメージが変わりました。 参加学生感想より

患者さんによっては、非日常にも日常にもなり得る病院という場所で、医師としてどのような医療が提供できるのか、今後も考え続けていきたいと思う。 参加学生感想より



～里親学生支援室からのお願い～

将来、滋賀県内で働くことに興味を持っている学生(里子)に対して、県下で活躍する一先輩として、学生生活や将来の進路などの相談にのるアドバイザー(里親)を募集しています。本事業に賛同していただける方は、里親学生支援室までメールで職業・氏名・「里親希望」と明記の上、お申し出いただきますようお願い申し上げます。(事業の詳細はHPをご覧ください。)

お問い合わせ先 滋賀医科大学里親学生支援室 TEL: 077-548-2072
E-mail: satooya@belle.shiga-med.ac.jp
URL: <https://www.shiga-med.ac.jp/~satooya/>



者等の方々にご協力いただき、ございました。



■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ 紫香楽病院より未来の医療を担う皆様に

独立行政法人国立病院機構 紫香楽病院
病院長

真田 充



① 紫香楽病院の概要

紫香楽病院は1941年に滋賀県立結核療養所として創設され、1947年厚生省に移管し、国立療養所紫香楽園として発足した80年以上の歴史を有した病院です。当初は結核診療に特化した病院でしたが、1974年より障害者診療を主体とした医療機関となり、現在は、①重症心身障害児（者）医療、②神経難病医療、③地域医療、以上を診療の柱として運営しております。病床は180床で全床障害者病床となっております。

当院は滋賀県西南部に位置し、日本六古窯の一つとして有名な信楽焼を輩出しております信楽町（現：滋賀県甲賀市信楽町）に立地しております。病院名である“紫香楽”は万葉仮名で聖武天皇が造設をした紫香楽宮に由来しています。周辺には多くの遺跡があり、豊かな自然に囲まれた優れた環境にありますが、新名神高速道路・信楽ICから近く、加えて2023年3月に全面改装された滋賀県道16号（大津信楽線）により大津湖南地域からのアクセスが飛躍的に改善するなど、利便性に優れた病院でもあります。



紫香楽病院正面

② 将来の医療人への期待

現代は高度先端・急性期医療に注目が集まっておりますが、紫香楽病院は慢性期医療が中心であり、目立たない印象が強い病院です。その一方で患者様およびご家族と関わる事が非常に多く、医の原点を実感しうる医療機関でもあります。当院の職員には国立病院機構が担う民間の医療機関では必ずしも実施されないであろう医療（セーフティネット医療）の重要性について繰り返し説明し、地域における障害者医療のスペシャリストを目指して日々努力しております。

これからの医療を担う若い皆様には、当院のような医療機関で働く機会が少ないかもしれません。し



私たちはすべての患者様のための心地良い医療環境づくりを目指します

かしながら私は全ての医療は慢性期診療に通じるものと考えており、障害者医療はその中心的役割を担っていると考えております。そのため今後医療人として働く中で、一度は障害者医療に触れて頂く必要があると考えております。このことは通常講義や各種講演でも繰り返し話しており、見学でも良いので当院の医療を「体験」して頂きたいと思います。

興味をお持ちの方は是非当院までご連絡下さい。障害者医療について丁寧に説明させていただきます。宜しくお願い申し上げます。

■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ ～春の研修を受け入れた信楽中央病院からお便り～

甲賀市立信楽中央病院
院長

北川 貢嗣



研修の様子

2026年3月の春の研修（日帰り）に甲賀圏域が何回目かで選ばれ、過日、学生さん8名と随行された教職員の方5名の計13名に当院を訪問頂きました。当院は常勤医4名の小規模体制から、どうしても午前中の再診外来を止めることができず、30分4名の外来枠分で学生さんへのプレゼンに充てました。当日は、自分が用意したスライド約30枚でのプレゼンテーションを行い、短い時間でしたが信楽の地域の、病院の、患者さんの特徴などをお話ししました。そのあと学生さんから積極的な質問を多数受けました。参加は3年生までとのことでしたが、学生さんらはさすが選ばれし研修参加者だけあり、意識が高く驚きました。時間が押してしまい、その後の朝宮地区での出張診療所建物見学＆お茶屋さんでの試飲は難しかったみたいですね。

そういえば、朝宮地区のお茶業界では空前の海外抹茶ブームで、春が早く来る他県のお茶が今年は3倍値とか、湧いておられるそうです。数年前は番茶はペットボトル用にしかならんからやる気が出ないと聞いていたので、今年は活況ですね。斜面での作業が辛いと思いますが、足腰を鍛えられてご長寿の方が多い印象です。



信楽高原鉄道「玉桂寺前駅」近景



道標とタヌキ

この時期（4月下旬）、稲作農家さんらも、田1反で20枚必要な苗床をつくったり、田植えの準備をしたり大変そう。トラクターの往来が増えます。通勤路では道路を横断している茶色い毛虫を避けたいくなります。陶器・陶芸関係の方も、GWの陶器祭り、駅前陶器市、作家市の書入れ時に向け、忙しそう。往診の途中に、軽トラの荷台に整列して移送されていくタヌキ達を見かけます。ゴルフ、釣り、畑、草むしりを趣味にしている人もシーズンインしてうれしそう（困るのは自分のテ

ンションがさほどでもない朝の通勤中、平日ゴルフで急ぐ高級車に後ろからせつつかれる時です）。あ、余談ですが、春はこんな背景ですから病院の初診外来にはほとんど人が来なくなります。まあ、地域が元気ならそれでいいんですけどね。最近レスパイト入院などやや活発にしまして、病棟はそこそこ忙しくなっております。

例年8月には複数の小規模医療機関と合同で、滋賀医大の地域枠の学生さんと、自治医大の滋賀県出身在学生さんと短期間の研修機会をもうけ、地域を体験して頂きます。今年は里親研修の学生さん達の有志の方にも入っていただけるよう働きかけようと思います。例年7月の第3土曜日には信楽で松明を奉納（練り歩く）できる「火祭り」があり、これと実習を絡めたいのですが、夏休みが8・9月の学生さんは忙しく難しいみたいですね。当院のできる範囲で8月に計画しようと思います。よろしかったら参加くださいませ。



信楽火祭り



甲賀市立信楽中央病院 正面

〈病院概要〉

救急指定 一般病床（回復期）40床
常勤医4名（自治医大3、滋賀医大1）
外来 約100人/日、在宅約40前後/月
出張診療所 3箇所（多羅尾、朝宮、田代）
特養ホーム（100床）の嘱託
園医1か所/校医4か所/産業医6か所

院長ブログ



北川が書いている、病院HPのブログです。良ければご笑覧ください。

■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ 訪問して下さった皆様へ

一般社団法人水口病院
病院長

青木 治亮



私たちの施設は概ね甲賀・湖南両市、約15万人弱の医療圏にあります。昨今は若年人口の都市部流出が顕著な地域です。このため、従前からの疾病構成や地域から求められることも大きく変わり、高齢者医療や介護関連に主軸が変わっています。しかし、歴史的な背景もあり、少数ながら従来からの偏見も根強く残っています。ただ、昨今は精神科医療に対する理解が深まってきたこともあり、随分と評価も良くなってきました。少なくとも、私たちの法人に就職される方々のご家族が反対することは皆無となりました。お陰で、毎年多くの仲間をお迎えしています。



研修の様子

直近の大きな変化としては、外国人職員の受け入れに力を入れています。当初の気持ちを思い起こせば、不安がいっぱいでした。まずは言葉の問題です。医療・介護という特殊性から、どうしても会話の中から機微を汲み取ることを要します。また、文化や価値観の相違も心配でした。特に高齢者の場合、外国人に馴染みのない方も少なくありません。「拒否反応を示す利用者も出てくるのではないだろうか？」そもそも、私たち自身が受け入れられるか…、挙げればキリがありませんでした。

しかし、私だけが身構えていたようでした。患者さん・利用者さんと軽やかに関わっています。職員とも何の違和感なく業務を分担しています。最も驚いたのは、言葉のトラブルが殆どなかったことです。もちろん、彼ら彼女らの十分な努力はありましたが、優しさと素敵な笑顔が、想いを通訳していました。むしろ、私たち自身が日常の業務に気を取られ、ともすれば忘れそうになる大切なものを思い起こさせられました。今では、出身国が6か国に広がりました。更には、看護師を含め国家資格を取得している者もいます。或る夕方、上手く立ち上がれない患者さんが、外国の名前を大声で呼んでいました。この場面で、全ては私の杞憂であったと確信しました。

残念ながら、今後も日本人の若年人口は減少するでしょう。そのうえ、決して労働条件が良いとは言えない私たちの職場です。未だに職員の使命感と誇りに依存していることも事実です。それでも、眼前の困っている方々からの求めには応えねばなりません。これからは、遠く海の向こうから渡って来た仲間と共に事業を進めてゆく法人でありたいと願っています。



カリオン時計

■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ 地域の未来を担う皆様へ ― 宿泊研修を受け入れて ―

一般社団法人水口病院
看護部長

與那城 隆幸



① 施設概要

一般社団法人水口病院は、滋賀県甲賀市水口町に位置する精神科単科病院です。明治41年（1908年）の創設から118年にわたり、地域の精神医療を支えてきた歴史を持ちます。

病床数は407床（精神科急性期治療病棟 1 単位・精神療養病棟 4 単位・認知症治療病棟 1 単位・精神一般病棟 1 単位）を有し、湖東・湖南・甲賀医療圏における精神科医療の「中核（ハブ）」として機能しています。また、早くから滋賀県指定の認知症疾患医療センターを併設し、早期診断から専門治療まで対応できる体制を整えています。

当院の特徴は、入院治療にとどまらない「途切れないサポート」にあります。急性期・診断から入院治療、そして退院後の地域生活支援まで、精神科デイケア「しろやま」・訪問看護・福祉施設やグループホーム・介護老人保健施設スキナヴィラといった関連施設と連携し、患者さんが住み慣れた地域で自分らしい生活を取り戻せるよう、一貫したケアを提供しています。



② 将来の医療人への期待

令和 8 年 3 月 17 日、滋賀医科大学・滋賀県立大学の学生 18 名が、甲賀市・湖南市地域医療を学ぶ宿泊研修の一環として当院を訪問されました。

院内の見学後に行われた意見交換の場では、学生から次々と鋭い質問が飛び出しました。「地域での精神科医療と急性期病院との役割分担をどう考えるか」「退院後の生活支援において、病院と地域がつながるうえで最大の課題は何か」——。その問いは、単なる施設見学にとどまらず、地域医療の構造そのものを深く掘り下げるものでした。対応した青木院長も「こちらが良い刺激をもらった」と振り返るほど、学生たちの視点は力強いものでした。

精神疾患の患者数は全国で約 614 万人（令和 2 年患者調査）に達し、平成 14 年比で約 2.4 倍に増加しています。一方、精神科医療を支える専門人材の数はほぼ横ばいで推移しており、需要と供給の乖離は年々大きくなっています。これからの医療を担う皆さんにとって、精神科領域の専門知識と地域医療の視点



を持つことは、社会的使命であると同時に、大きなやりがいにもつながります。

「画像診断や定型処置は AI が担う未来においても、こころのケアは人にしかできない」——。これは当院が大切にしているメッセージです。薬の評価、日常生活の支援、そして患者さんの心に寄り添うこと。これらは人間同士の信頼関係と共感なしには成立しない営みです。

今回の研修で示してくださった、地域医療への深い関心と問題意識を、ぜひ現場に持ち込んでください。甲賀の地で皆さんの活躍を心よりお待ちしております。

■ 訪問先の皆様からのメッセージ

■ 新時代に必要な力

医療生協 こうせい駅前診療所
所長

佐々木 隆史



①施設概要

医療生協こうせい駅前診療所 常勤医師2名 総合診療医を中心とした診療所です。生協法に基づいた医療生協の診療所として、地域の皆さまと一緒に建設活動を行い、2013年に開設しました。家庭医として、地域に必要とされることを、アメーバのように触手を伸ばし縮めて行っています。在宅医療、病児保育事業、コロナ対応、医師不足による園医・校医・作業所管理医師、医療だけでなくQOLに直結する交通の問題、いのちを脅かす気候変動の問題など。我々は、地域のインフラの一つとして働く一方、診察室で待つだけでなく、まちに飛び出る「まちの医療者」として、安心して住み続けられるまちのために、日々楽しく奮闘しています。



毎年恒例、診療所と地域の人たちの祭り

②将来の医療人への期待

今は、世界はとても不安定になっています。法による世界秩序が綻びをみせ、AI時代によるフィルターバブルに象徴される分断の時代になっています。日本は少子高齢化・人口減少社会といういまだに人類が経験したことがない社会に突入。そして地球は人類史上三年連続過去最高気温を更新するなど気候変動時代に入っています。そんな荒海に乗り出していく皆さんを応援します。そんな時代に必要だと思う力は、問題設定力、想像力、そしてレジリエンスです。

「この患者さんの健康を妨げているものは何か」「この地域で、もっと健康に暮らすために何ができるか」「医療そのものが、未来の健康を損なっていないか」

想像力を持って、問いを持ち続ける人が、地域医療を変えていきます。上手いかななくても立ち上がる、



日本プライマリ・ケア連合学会学術集会
プラネタリーヘルス委員会での一コマ

る、災害があっても立ち直る、地域医療は、未来をあきらめない医療です。

医師だけ、医療だけで仕事が完結する時代ではなくなっています。どんどん過密化している大学生活だと思いますが、ぜひ、大学の外に出てください。きっと素敵な出会い、体験が待っています!!

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科 第1学年

今回の里親研修は、重症心身障がい者(児)医療を行っている紫香楽病院や、精神科専門病院である水口病院の先生のお話、ブラネタリーヘルスを行っておられるこうせい駅前診療所の先生のお話など、私にとってあまり馴染みのなかった医療について知ることができ貴重な機会となった。

紫香楽病院の看護師長さんが、患者のわずかな変化が急変に繋がることもあるので、それを見逃さないようにすることが重要だと話されていたのが印象に残った。普段から患者さんに深く関わり、様子を知っておくことがケアに大切なのだと感じた。患者さんの家族の背景も含めて支援を考えていくということや、キティちゃんや移動水族館などの社会資源と繋げたケアの取り組みも印象に残った。患者さんを個人として切り離して考えず、家族や社会との繋がりの中で考えていく視点を持ちたいと感じた。

こうせい駅前診療所の佐々木先生が話されていた、ブラネタリーヘルスのことも勉強になった。地球の環境を整えることが人間の生活環境や経済状態を整えることに繋がり、最終的には人間の健康を作っていくのだと学んだ。急に地球のためにと考えて行動するのは難しいが、まずは自分や周りのために考えながら自然と人間との相互関係を意識していきたいと感じた。今後、自分でもブラネタリーヘルスを学んでみたい。

滋賀医科大学 医学科 第1学年

紫香楽病院、水口病院、こうせい駅前診療所を見学させていただいた。それぞれの病院/診療所が「神経難病や重症心身障がい」、「精神科医療と福祉」、「医療と気候変動」という医療において重要なテーマを扱っておられていることを学んだ。今回はその概要に触れる機会であったが、今後1つ1つについて、じっくり考えていけたらと思う。特に気候変動については、自分たちが今からできることもあると思うので、少しずつ学んでいきたい。

滋賀医科大学 医学科 第2学年

今回の研修において、とりわけ印象に残ったのは病児保育の利用率がそこまで高くないという点です。事前学習を行った際、私は湖南市における病児保育の対象人数と、受け入れ可能人数の差から、需要に対して供給が追いついていないのではないかと考えていました。しかし実際には、祖父母などに診てもらうなどの手段も取れるために需要は逼迫していないとのことでした。私の頭の中には近親者による援助という概念が抜けていたので、新たな視点を会得することができました。ありがとうございました。

滋賀医科大学 医学科 第1学年

低学年のうちから病院を見学できる機会は多くない中で、今回のプログラムでは甲賀市内の複数の医療機関を効率よく回ることができ、大変貴重な経験となりました。さらに、院長先生に直接質問する機会も設けられており、現場の考えや実情に触れることができた点も非常に有益でした。また、見学の合間には観光やレクリエーションの時間も用意されており、医療面だけでなく甲賀市そのものの魅力についても理解を深めることができました。全体として非常に充実した内容で、機会があれば次回もぜひ参加したいと思います。

滋賀医科大学 医学科 第2学年

甲賀市での里親研修に参加し、地域医療について理解を深めることができました。病院見学では、地域の住民の方々がどのような医療を必要としているのかを知るとともに、農繁期などの時期によっては病院を受診しにくいという地域特有の事情があることが印象的で、とても興味深く感じました。また、信楽焼への給付体験や現地で採れたお茶をいただくなど、甲賀地域の文化にも触れることができ、学びと楽しさの両方を感じられる貴重な研修でした。

滋賀医科大学 医学科 第1学年

今回は甲賀・湖南市方面の研修でした。私は紫香楽病院の見学に行かせていただきました。重度心身障害者の方を対象とする病院は初めて見学しました。1番驚いたのはスヌーズレン室というものがあつたことです。調べてみるとオランダ語の「クンクン匂いを嗅ぐ」、「うとうとする」という言葉を組み合わせた造語だそうです。1970年代にオランダの障害者施設で考案され、ヨーロッパをはじめ全世界に広がりました。病院の中にちょっと不思議な空間があつて非日常を味わっているようでした。病院を知るだけでなく、他の学年の人ともたくさん関われたのが嬉しかったです。

滋賀医科大学 医学科 第2学年

私は滋賀県出身ですが、今回の里親研修の目的地であった甲賀方面はあまり行ったことがありませんでした。思っていた以上に大津から車で行きやすく、滋賀の中でも辺鄙な場所というイメージが変わりました。信楽中央病院では、信楽の医療の現状と課題について院長先生からお話を聞き、地域医療に対する解像度が上がりました。また、水口病院の見学では、どこか閉鎖的な印象があつた精神科病院が、実際には明るくて開放的であつた様子が印象に残っています。とても濃密な時間を過ごせましたが、新しい刺激を受けてまだまだ学び足りないのでもたじろりと時間を持って再び伺いたいと思います。このような機会を用意してくださった皆様に感謝申し上げます。

いずれの施設でも院長先生から直接お話しを伺え、とても有意義な学びとなりました。また、単なる見学ではなく陶芸絵描き体験はとても楽しかったです。今後もこのような企画を続けてくださると大変ありがたいです。



宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科 第2学年

里親研修には一年ぶり二度目の参加となる。今回私が参加したのは、行ったことのない信楽という地域に一度行ってみたいかったためだが、事前のアンケートで紫香楽病院について調べた時、その理由にこの病院を見学してみたいという気持ち加わった。

今回の研修での最大の学びは、「医療は治療ではない」ということだった。特に紫香楽病院ではスヌーズレンやハローキティの訪問など様々な楽しい取り組みが行われていた。

これは治療ではないが、紛れもなく医療である。何より驚いたのは院内に笑い声が響いていることで、明るい院内ではそこに確かにあるはずの「病気になった」「障害を抱えた」という悲しみも柔らかく包まれて癒されているようだった。さらに、水口病院では「老健の設計が、家に帰った後のことを考えて生活空間に似た設計になっている」「時計の時報や食べ物によって患者さんに季節を感じてもらっている」などという説明を受け、ここにも確かに「治療ではない医療」があるのだと感じた。

集合写真を撮った後、私は紫香楽病院の真田先生に「患者さんが入院される期間はどれくらいですか」と質問した。すると「一生の人もいますよ」という答えが返ってきた。

その事実非常に驚く反面、どうしてそんな当たり前のことを訊いてしまったのだろうと反省した。障害にせよ、神経難病にせよ、それらは基本的に不可逆な性質を持つ。患者さんはその病気、あるいは障害と一生付き合って生きていくのだ。多くの人にとって病院は非日常だが、患者さんにとっては日常なのだ。そのことを忘れてはいけないと強く感じた。水口病院でも歳を取った患者さんの中には若い頃から入院していて、ずっと病院で生活している人もいますと聞き、これもまた同じことだと思った。そして、そのような患者さんによこそ、治療以外の医療が必要なのだろう。そして、患者さんによっては、非日常にもなり得る病院という場所で、医師としてどのような医療が提供できるのか、今後とも考え続けていきたいと思う。

最後になったが、こうせい駅前診療所では医療生協というこれまで知らなかった医療の形を知ることができた。集会所と併設されており、地域住民の生活の中に溶け込んでいると知ったことで、本来医療は非日常なものではなく、生活と地続きのものなのかもしれないと考えた。佐々木先生の「みどりのドクターズ」としての活動もそのような土壌の中だからこそ生まれたのかもしれない。医師としてこのような働き方もあるのだと目から鱗が落ちる思いだった。

今回の研修では多くのことを学ぶことができた。だが、まだまだ気づくことができなかった部分もたくさんあるだろう。今後臨床医学を学んだあと、また見学に行き、その時今回見つけられなかったものを見つめたいと強く思う。

滋賀医科大学 医学科 第3学年

精神科の単科病院を見学できる貴重な機会でもとても勉強になりました。積極的に質問する他の学生の姿が、刺激になりました。患者がどう社会に復帰していけるのかそのシステムを理解できませんでした。他の病院と違う雰囲気があり病院感があまりなかったです。

滋賀医科大学 医学科 第3学年

研修では3つの医療機関を訪問しました。特に印象に残ったのが水口病院です。院内は広々として明るく、これまで精神科単科病院に対して抱いていた閉鎖的なイメージが変わりました。また、院内保育園など福利厚生が充実しており、職員が安心して働ける環境づくりにも力を入れていることが伝わってきました。さらに、院長先生から伺った精神科患者さんに対するスティグマのお話が印象的で、精神医療を取り巻く社会的課題について改めて考えさせられました。宿泊を伴わない1日研修ではありましたが、学びの多い有意義な時間でした。

滋賀医科大学 医学科 第3学年

精神科単科である水口病院で、リハビリ室を見学させていただいた場面が特に印象に残りました。医療と福祉の連携や地域でのNPO活動に関心がある私にとって、SSTや就労支援といった言葉は耳に馴染みのあるものでしたが、医療の現場で実際に用いられているのを聞いたのは初めてでした。医療と福祉が密接に繋がりながら支援が行われていることを実感し、今後の学びへの意欲が高まりました。

滋賀医科大学 医学科 第3学年

今回の研修では、紫香楽病院・水口病院・こうせい駅前診療所の三施設を見学しました。紫香楽病院では重症心身障害児者医療の現場を拝見し、明るい雰囲気の中で行われる様々な工夫に触れ、理解が深まりました。水口病院では精神科単科病院としての役割や他科連携、医療者の働き方について貴重なお話を伺いました。こうせい駅前診療所では医療福祉生協の仕組みや環境と医療の関係について学び、視野が広がりました。多くの学びを得た大変有意義な研修でした。



宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 看護学科 第3学年

1年生の頃から研修に参加させていただき、甲賀・湖南地域については初めての研修でした。地域医療ということで、特に朝宮出張診療所やこうせい駅前診療所などの診療所では、患者さんと医療者が顔見知りの関係で、患者－医療者としての関係のみならず、地域住民同士としての繋がりも感じられ、地域に根差した医療を実践されていることを実感しました。また、医療としての取り組みのみならず、甲賀・湖南地域としての特徴や地域住民の方との交流などについても講義していただき、今回の研修を通して甲賀・湖南地域について学びを深めることができたと考えます。

滋賀県立大学 人間看護学部 第1学年

3月17日の研修に参加させていただきありがとうございました。今回の研修では、私の地元信楽を含めたたくさんの病院の地域医療を支える病院としての役割をたくさん学ぶことができました。地域医療の現状や他業種連携の重要性など実際の現場でしか分からないことをたくさん知るきっかけにもなりとても貴重な経験でした。

他学科の学生との交流を通して、様々な視点に触れ、様々な視点から今後の医療や地域医療について考えることができとても有意義な体験でした。今回の貴重な経験を、今後の学習や進路選択にも活かしていきたいと思っています。本当に貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

滋賀医科大学 看護学科 第3学年

今回の研修で学んだことは、医療へのアクセスがしづらい地域における医療の性質と精神医療の難しさです。今回見学した甲賀市は病院数が少なく、またその病院でできることが限られています。限られた医療資源を最大限活用して可能な限り医療ニーズに対応し、対応しきれない分は市外の病院と連携して対応しており、改めて医療機関同士の連携の重要性を感じました。また、精神医療においては改善されつつはあるものの偏見を持たれることが多いという現状があることを学び、それによって医療に繋がることが遅れてしまったり治療の継続ができなかったりすることがあることについて精神医療の難しさを感じました。また、精神疾患に対して正しい知識を持つ医療者として、偏見に対して毅然とした態度で向き合っていく必要があることを学びました。

滋賀県立大学 人間看護学部 第1学年

今回の里親研修では、紫香楽病院での見学が最も印象的だった。そこで「重症心身障害児」という言葉を初めて知り、実際に自分の目で見たことで大きな衝撃を受けた。

これまで自分が思い描いていた小児科での療養生活とは大きく異なり、長時間ベッド上のみで過ごす子どもや、安全のために大きな柵が設けられている様子に戸惑いも感じた。

一方で、看護師の方々が一人ひとりの子どもに真摯に向き合い、少しでも楽しく過ごせるように関わっている姿が印象に残った。また、養護学校の先生方も関わりながら、子どもたちの学びを大切にしていることを知った。

今回の見学を通して、一般病棟とは異なる、生活に寄り添う看護の大切さを学ぶことができた。

滋賀県立大学 人間看護学部 第1学年

滋賀県での研修を通じ、重度心身障害者福祉の先進的な体制に触れ、地域全体で生命を支えることの重みを実感した。また、精神科看護に対して当初抱いていた「多忙で余裕がない」というイメージも大きく覆された。デイケアなどの日常生活の場では、看護者と患者の間に穏やかで密なコミュニケーションが絶えず存在しており、対話を通じて信頼関係を築く大切さを再認識した。この学びを糧に、2年次の実習では患者の生活背景まで汲み取った主体的な関わりを目指したい。

滋賀県立大学 人間看護学部 第3学年

今回初めて研修に参加させていただきました。

甲賀・湖南市の病院や医療機関を複数見学させていただいたり、その地域の特徴や医療体制などの詳しい説明を通して、地域での医療の実際を知ることができ、とても良い経験になりました。加えて、陶芸体験や特産品のお茶を飲む体験など、医療だけではなく、その地域の文化に触れる内容も充実しており、楽しみながら対象の地域を学ぶことのできるプログラムでした。



第四弾！

2025年
11月21日金

オープンダイアログを通して考える チームでの対話のあり方

滋賀医科大学医学部医学科

第6学年 迫 未尋



2025年度課外授業シリーズ第4弾は、「オープンダイアログを通して考えるチームでの対話のあり方」と題して開催されました。講師には、浅井東診療所のメンタルチーム「ここくら」より、北川景都さん、寺村育美さん、川瀬佳奈さんをお招きしました。「ここくら」は医師、看護師、ソーシャルワーカーからなるチームです。2024年9月の始動以来、オープンダイアログの実践と院内のメンタルヘルス診療のシステム作りを行っておられます。そこでは、患者さんも支援者も肩書きにとらわれず、フラットな関係性で対話をするを大切にされています。

今回の授業では、最初に北川さんから診療所で診るメンタルヘルスやこころの話、そしてそれに対するアプローチの一つとして、オープンダイアログについて教えていただきました。診療所には「一人では解決できない悩みや課題」を抱えた患者さんが多く訪れます。私たちは悩んでいる人を前にすると、つい「良い解決に向けてアドバイスをしなければ」と思いがちです。しかし、時にはアドバイスよりも、ただみんなで対話することが状況を良くすることがあります。オープンダイアログはそのような考え方や対話方法の一つであり、講演では事例を交えたお話の後、2つのワークを通して実際に体感することができました。



寺村さんと川瀬さんからは、オープンダイアログの実践による気づきや実際の経験を共有していただきました。「患者を正解に導く必要はないこと（そもそも正解とは何なのか）」、「患者協働の促進」、「あらゆる声に耳を傾け、すべての声を尊重すること」、「あるがままを受け入れること」、そして「開かれた対話の方法を通して、役割にとらわれないという意識変容があったこと」などをお話いただきました。お二人の経験談から、実際の診療現場でどのようにオープンダイアログが活かされているのか、より理解を深めることができました。

私自身、お三方の講演と、ワーク1「相手の声と自分の内なる声を聞いてみよう」、ワーク2「リフレクティングを体験してみよう」を経験し、新たな対話の方法を知るとともに、「話を聞く」ときの考え方について多くの発見がありました。これを知る前と後とでは、人の話を聞く場面での姿勢が変わる

のではないかと思います。今回の体験に基づく学びを言葉で表現するのは少し難しく感じますが、このように一概に文章では表せない学びや経験ができることこそが、課外授業シリーズの良さであり、本当に貴重な機会だと感じています。

最後になりますが、今回ご登壇いただいた北川さん、寺村さん、川瀬さん、そして開催を支えてくださった皆様に心より深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



第五弾!

2025年
12月26日金

総合診療医のキャリアとEBMの実践

公立甲賀病院 今北 翔子
(滋賀医科大学医学科 2026年3月卒業)



2025年12月26日に開催しました課外授業シリーズ第5弾では、聖母病院総合診療科の南郷栄秀先生にご講演いただきました。「何か専門を取ってから総合診療へ行ったほうがいいと言われましたが、そうなんですか?〜ダブルボードとかEBMとかってかっこいいですね〜」と題し、これからのキャリアに悩む学生に向けて、総合診療のあり方やEBMの本質についてお話をいただきました。



講演ではまず、南郷先生ご自身の歩みについてご紹介いただきました。EBMがまだ広く浸透していなかった時代から、ジャーナルクラブやオックスフォードでのEBMワークショップに参加されるなど、早くから学び実践されてきたご経験が語られました。EBMについては、「ただのエビデンスではない」という言葉が印象的でした。病態や治療法を一つずつ学んできた私たちは診断がつけば治療は決まると考えがちですが、

実際の臨床では必ずしもそうとは限りません。EBMは判断の拠り所であり、①疑問の定式化、②情報収集、③批判的吟味、④患者への適用、⑤評価の5つのステップで実践されます。中でも④は重要であり、患者さん一人ひとりの背景や価値観により最適な選択が異なることを学びました。

そして総合診療については、総合内科が「病気」を切り口とするのに対し、総合診療は「生活」を切り口とし、患者さんの背景まで含めて診療を行う点が特徴であるとお話をいただきました。総合診療は「カメレオンのような存在」として、現場のニーズに応じて役割を変え、診療所では生活を基盤としたケアを担い、病院では複数の問題を抱える患者さんを俯瞰し専門医と連携しながらケアを統合します。総合診療は地域と病院、診療科同士をつなぐ“ハブ”としての役割を担っていることを再認識しました。また、総合診療医が会おう疾患は幅広い分野に渡りますが、コモンな疾患は専門医と同等の質で診療する必要がある点も印象的でした。その質の担保としてEBMが重要であり、現場での実践について具体的に学ぶことができました。

講演会後は懇親会も開催し、学生たちそれぞれが抱える悩みを南郷先生と直接共有し語り合い、そして総合診療の未来についてもさらに深く学ぶ機会となりました。私自身も進路選択の岐路に立つ中で、この課外授業シリーズで得たことを、「どう考えどう決めるべきか」の一つの道標として学び続けていきたいと思います。

改めまして、ご講演いただきました南郷先生、並びに開催にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



第一弾！

2026年
4月23日(木)

「暮らしの中の医療」地域に根ざす実践から学ぶ

滋賀医科大学医学部医学科

第2学年 森竹 貫人



課外授業シリーズ第1弾として、医療法人社団オレンジ理事長の紅谷浩之先生をお招きし、「暮らしの中の医療」をテーマにご講演いただきました。紅谷先生は、2011年に福井県初の在宅医療クリニックを開設され、その後、医療的ケア児の活動拠点「オレンジキッズケアラボ」、長野県軽井沢町のケアの文化拠点「ほっちのロッジ」などを立ち上げ、医療・福祉をきっかけにした地域づくりに取り組まれています。



今回、紅谷先生をお招きしたいと思った理由は、先生の実践が、企画者である私自身にとって、医師を志すきっかけの一つになったからです。以前、教育の現場で働いていた頃に「ほっちのロッジ」の取り組みを知り、医療的ケア児を含めた「みんな」の居場所をつくる実践に大きな衝撃を受けました。そのような先生を今回お招きできたことは、大変感慨深いものでした。

講演では、病気を治すことだけが医療ではなく、人が病気や障がいを抱えながらも、自分らしく地域で暮らすことを支える医療のあり方が語られました。特に印象的だったのは、医療的ケア児や高齢者を「弱い人」「支えられる人」として見るのではなく、地域や社会を変える力を持つ存在として捉えておられた点です。医療的ケア児が友達と遊び、海水浴や登山、サーカスに参加する姿は、単なる支援の対象ではなく、新しい社会のあり方を示しているように感じました。また、病院では「患者」として見える人も、カフェや地域の場では、友人として、趣味を持つ一人の人として、時には誰かに教える存在として、様々な役割を持って生きています。病気や障がいで人を分けるのではなく、好きなことややりたいことを通してつながる地域医療の姿が、そこにはありました。

参加した学生からは、「病気があっても暮らしやすい社会へと変わっていく、社会モデル的な解決が今後必要であると学んだ」「地域社会と境界で隔てられていない医療が、理想の医療ではないかと感じた」などの感想が寄せられました。多くの学生にとって医療の見方が広がる機会になったように思います。

また、講演の約1週間前には、事前企画として紅谷先生が大切にされている「ポジティブヘルス」について企画者からオンラインで紹介しました。参加者からは、講演内容への理解が深まったという声もあり、今後の企画づくりにも生かしていきたいと感じています。

今回の講演を一度きりの学びで終わらせるのではなく、ここで生まれたつながりを育てていくため、講演に参加した学生を中心にオレンジへの見学ツアーを計画しています。実際の地域医療の現場に触れ、講演で学んだ「暮らしの中の医療」について、さらに理解を深めていきたいと思っています。



リトルベビーとそのご家族との 交流会・講演会を開催しました

滋賀医科大学医学部医学科

第4学年 荒木 泰人

(滋賀医科大学課外活動団体 国際保健・地域医療研究会TukTuk代表)



3月29日、「リトルベビーサークル滋賀のCOAYU」と学内で交流会を実施した。リトルベビーとは、出生体重2500g未満で生まれた子どもたち、すなわち低出生体重児のことである。滋賀のCOAYUでは、リトルベビーとその家族がつながる場として、交流会や写真展などを開催されている。例年は瀬田公園でお花見を行われていたが、参加者の中には滋賀医科大学医学部附属病院に通院・入院していた方もおり、「ぜひ大学で開催したい」と国際保健・地域医療研究会TukTukに声をかけていただいたことから今回の交流会が実現した。

当日は医学生6名と、滋賀のCOAYUのメンバーが参加し、自己紹介や歓談を通して交流を深めた。自己紹介では子どもたちが名前とともに「何gで生まれたか」を話してくれた。とても小さく生まれた子どもたちが、今は元気に成長している姿を目の当たりにし、医学生にとっても命の力強さを感じる貴重な時間となった。また、ご家族から直接話を伺うことで、退院後の生活や成長への思い、不安や支援の必要性について学ぶ機会にもなった。

交流会をきっかけとして6月12日には「小さく生まれた子どもとその家族を支える」と題した講演会をTukTuk主催で開催した。講師には、滋賀のCOAYU代表の小島かおり様と、リトルベビーサークル全国ネットワーク相談役の板東あけみ先生を招き、当事者と支援者の両面から話をいただいた。小島様からは、当事者として経験した不安や、医療者との関わりの中で感じたことについて話していただいた。板東先生からは、低出生体重児とその家族を支える取り組みとして、リトルベビーハンドブックを中心に紹介いただいた。リトルベビーハンドブックは、母子健康手帳のサブブックとして開発された。母子健康手帳は標準的な発達に沿って作られているため、体重を記録する目盛りの下限が高すぎたり、月齢ごとの発達項目に丸を付けられないことに保護者が悩んだりする場合がある。こうした不安に寄り添い、小さく生まれた子どもたちの成長をその子のペースで記録できるようにしたものが、リトルベビーハンドブックである。

学生だけでなく医療従事者や当事者など多くの方に参加いただいた。低出生体重児として生まれる子どもは約10人に1人とされており、将来どの診療科に進むとしても、医療者として関わる可能性がある。その時に子どもと家族に寄り添えるよう、当事者の声から学ぶことの大切さを実感する機会となった。



滋賀県版「リトルベビーハンドブック」



6月12日講演会 参加者で記念撮影

滋賀県では、将来県内で地域医療に貢献する意思を持った医学生に対して、修学資金等を貸与しています



◆ 医学生向け貸付金



	A. 滋賀県医師養成奨学金	B. 滋賀県医学生修学資金
募集人員	16名	6名
募集対象	滋賀医科大学医学部に地域枠で入学した者	全国の医学部 入学初年度の者 (学士編入生可)
募集時期	滋賀医科大学入学試験の出願期間と同じ ※地域枠で入学した場合は本奨学金の貸与を受けることを条件としてお願いいただくため。	7～8月(予定) ※最新情報は、滋賀県医師キャリアサポートセンターHPIに掲載します。
貸与期間/金額	1年生～6年生(6年間) 年額180万円(総額1,080万円)	入学初年度～6年生(最大6年間) 年額180万円(最大1,080万円)
県内従事義務 (免除条件)	次の条件を満たした場合、貸与した貸付金の返還は全額免除されます。 ・県内医療機関等に9年間勤務すること。 ・臨床研修を除く7年間のうち、次のいずれかで4年以上勤務すること。 ① 医師が不足する地域(大津圏域、湖南圏域以外)に所在する県内の病院 ② 県内の診療所(総合診療専門研修プログラムにおいて基幹施設・連携施設とされている診療所、在宅療養支援診療所に限る) ③ 県内の行政機関(公衆衛生医師として勤務する場合に限る) ・キャリア形成プログラムに参加すること(次ページ参照)	
その他	・県内医療機関等への従事義務の履行を一時中断し、大学院進学や国内外の医療に関する研修の参加、県外勤務を行うことも可能です。 【一時中断できる上限年数】 最大10年間※+育児休業および介護休業ならびにこれらに相当する休業(無制限) ※上記10年間のうち、返還免除対象施設以外の医療機関で診療業務等に従事しているとき(研修を除く)等の期間は最大4年までです。 ・返還事由に該当したときは、貸与した貸付金を利息とともに一括で返還いただきます。 ・詳しくは、各制度の貸与要綱等をご確認ください。	

〈キャリアイメージ〉

在学中						県内従事義務(返還免除対象施設で勤務)								
1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	7	8	9
180万円	180万円	180万円	180万円	180万円	180万円	臨床研修 (県内病院)		臨床研修を除く7年間のうち、次のいずれかで4年以上勤務 ① 医師が不足する地域(大津圏域、湖南圏域以外)に所在する県内の病院 ② 県内の診療所(総合診療専門研修プログラムにおいて基幹施設・連携施設とされている診療所、在宅療養支援診療所に限る) ③ 県内の行政機関(公衆衛生医師として勤務する場合に限る)						

キャリア形成卒前支援プランによる支援

キャリア形成プログラムによる支援

◆ キャリア形成卒前支援プラン（在学中）



【キャリア形成卒前支援プランとは】

地域医療へ貢献する意思を持つ医学生に対し、地域医療や将来の職業選択に対する意識の向上を図り、地域医療に貢献するキャリアを描けるよう支援するプランです。

【適用対象者】

- ・ 滋賀県医師養成奨学金の貸与を受けている学生
- ・ 滋賀県医学生修学資金の貸与を受けている学生
- ・ 自治医科大学の学生
- ・ その他キャリア形成プログラムの適用について同意した学生

【プラン内容（例）】

- ・ 滋賀県医師キャリアサポートセンターの専任医師（キャリアコーディネーター）による定期的な面談
- ・ 修学資金等の貸与を受けていた先輩医師との交流を通じて、県内従事期間中のリアルな働き方を聞くことができる「OB・OG会」
- ・ 希望の診療科で半日～1日程度の見学ができる「プチ・クラ（病院見学）」
- ・ 低学年から先取りで、スキルズラボのシミュレーターを利用した「手技体験会」
- ・ 一泊二日で、地域の医療機関に勤務する医師や看護師、地元住民の方と直接交流できる「宿泊研修」
- ・ 地域で医療業務に従事する医師を講師に招いた課外授業
- ・ 自治医科大学滋賀県同窓会である「さざなみ会」の医師が勤務する診療所等で実習を行う「夏季地域医療実習」

◆ キャリア形成プログラム（卒後）



【キャリア形成プログラムとは】

- ・ 以下の①、②の両立を図る制度です。
 - ① 対象医師のキャリア形成を支援し、滋賀県の地域医療を支える人材を育成すること。
 - ② 医師が不足する医療機関への医師を派遣することにより、県内の医師偏在を解消すること。
- ・ 滋賀県医師キャリアサポートセンターの専任医師（キャリアコーディネーター）と面談し、県内で希望するキャリア形成ができるよう支援します。

【適用対象者】

- ・ 滋賀県医師養成奨学金の貸与を受けた医師
- ・ 滋賀県医学生修学資金の貸与を受けた医師
- ・ その他キャリア形成プログラムの適用を希望する医師

◆ お問い合わせ先

滋賀県 健康医療福祉部 医療政策課 医師確保係

TEL : 077-528-3613

E-mail : ef00070@pref.shiga.lg.jp

滋賀県医師キャリアサポートセンターHPはこちら→



滋賀県医師キャリアサポートセンター (滋賀県地域医療支援センター) からのお知らせ



手技体験会を開催しました！

3月14日(土)、滋賀県医師キャリアサポートセンター（通称：キャリアサポ）が企画するキャリア形成卒前支援プランの一環として、第2回『現役医師が指導！医学生のための手技体験会』を開催しました。

当日は医学生20名が参加し、5つの診療科からお招きした講師の先生方から、内視鏡、分娩等の手技についてシミュレータを用いて優しく丁寧に指導いただきました。

参加者の満足度は高く、体験会後に実施したアンケート等で今後の開催にも期待する声を多くいただきました。

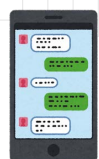
また、体験会では、医学生間及び各診療科の講師の先生方との交流を深めることができました。キャリアサポでは、今年度も同様のイベントを開催する予定です。



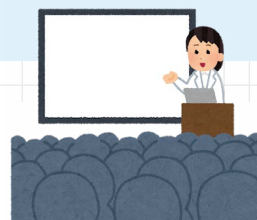
滋賀医科大学のオリエンテーションに 山原副センター長と滋賀県が参加しました！

4月13日(月)、滋賀医科大学で開催された地域医療重点コースオリエンテーションに山原副センター長（4月より就任）と滋賀県の担当者が参加し、この春に滋賀医科大学へ入学した地域医療重点コースの医学生に向け、奨学金制度の内容やキャリアサポで開催するイベント（キャリア形成卒前支援プラン）等について説明しました。

参加した学生は真剣な表情で説明を聞いており、大学卒業後の自身のキャリア等について深く考えている様子が伺えました。



キャリアサポ公式LINEの友達募集中！



キャリアサポ公式LINEでは、医学生の奨学金に関する情報やイベントの紹介、滋賀医科大学の入学試験の案内など、滋賀県で医師として働くことを目指す方・滋賀医科大学の受験を目指す方に向けた情報を毎月配信しています。

興味のある方はこの機会にぜひ友達登録をお願いします！

滋賀県医師キャリアサポートセンター公式LINEのお友達登録はこちらから→



お問い合わせ先

滋賀県医師キャリアサポートセンター

滋賀医科大学クオリティマネジメント課 病院研修係内（附属病院D棟1階）

住所：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町

TEL：077-548-2826 E-mail：ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp

相談窓口も設置しています。
詳しくはキャリアサポHPをご覧ください。



地域医療を学ぶということ — 滋賀から未来の医療人へ —

滋賀県医師会理事 雨森 正記



滋賀県で地域医療に携わり四十年以上が経ちました。現在、私は診療所を拠点に外来診療や在宅医療を行いながら、総合診療医の育成や初期研修医の教育にも関わっています。近年、滋賀県の地域医療は大きな課題に直面しています。人口の高齢化が進む一方で、地域で働く医師の高齢化も進み、特に琵琶湖大橋以北の地域、とりわけ中山間地域では、学校医・園医や在宅医療に携わる医師の確保が難しくなっています。このままでは、地域の医療体制の持続が危ぶまれます。

さらに、近年の医療は専門分化が急速に進み、特定の臓器や疾患に特化した診療が重視される傾向が強まっています。しかし、地域で求められる医療はそれだけではありません。複数の疾患を抱える高齢者、生活背景に課題を持つ患者、在宅で療養する方々など、全体を見て支える医療が必要です。その中心となるのが総合診療医です。専門性を持ちながらも、患者さんを「人として丸ごと診る」視点を持つ医師の養成が、今まさに求められています。

一方で、医師の研修の多くは病院中心で行われています。外来診療、在宅医療、予防接種、乳幼児健診、学校医活動など、地域に根ざした医療を体系的に学ぶ機会は決して多くありません。地域医療の課題を解決するためには、こうした分野を実践的に学ぶ機会の充実が不可欠です。滋賀県ではこうした課題に対応するため、初期研修医を対象とした「WATCH in Shiga」などの取り組みを行い、病院と診療所の連携や地域医療の実践を学ぶ機会を設けています。また、地域医療研修では診療所や在宅医療の現場に入り、患者さんの生活背景を含めた医療を体験します。

地域医療の現場では、診療だけでなく多様な役割が求められます。学校での保健教育や救急対応、ワクチンの説明、地域住民への健康増進活動、さらには看取りに関する支援など、医療は地域社会と深く結びついています。これから医療を志す皆さんには、ぜひ地域に目を向けてほしいと思います。医療は病院の中だけで完結するものではありません。地域の中で人と関わり、その生活を支えることこそが医療の本質です。そして、その中心に総合診療があります。滋賀の地域医療の現場で、皆さんとお会いできる日を楽しみにしています。



「WATCH in Shiga」



レジデントデイ（総合診療プログラム勉強会）

入会・ご寄附のご案内

皆様からの会費とご寄附金を財源として活動を進めてまいります。出費がかさむ折とは存じますが「地域医療を担う医学生看護学生の育成支援事業」にご支援いただける方々のご協力をお願いいたします。

会員の種類		会 費	入会金 (初年度のみ)
正 会 員	個 人	年会費 2,000円 + 寄附金 3,000円以上	5,000円
	団 体	年会費 5,000円 + 寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上 できましたら 3,000円以上	
寄 附 金		随時受付けております	

広報誌「めでる」

広告募集

貴施設の魅力を発信するために「めでる」を活用しませんか？

滋賀県内の医療機関、将来の医療人、地域の方々に配布しています



メディカルめでるちゃん

掲載料 A4 1 ページ 50,000円
A4 1/2ページ 30,000円
A4 1/4ページ 20,000円

詳細は事務局までお問合せください
TEL : 077-548-2168
Mail : medsatooya@gmail.com

編集後記

特集した甲賀市・湖南市方面での研修では、学生が医療機関の取り組みを直接見て学び、地域医療への理解を深める貴重な時間となりました。文化に触れる体験もあり、地域の魅力と医療のつながりを感じる一日となりました。訪問先の皆さまのご協力に感謝いたします。今年度も年2回の研修を予定しております。地域の皆さまには、引き続きご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.27

発 行：2026年8月20日
編 集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
所 在 地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
T E L：077-548-2168
U R L：<https://www.shiga-iryo-ikusei.jp/>